《ちゅん……ちゅん……さぁー》
(朝を知らせる鳥の声、森の中を静かに流れる風)

《ざっざっざ……》
(歩き続ける足音)

ナコ
「ふぅ……大分歩いたのじゃ。
ほれ、見えるかのぅ？
あそこじゃ……少し草臥(くたび)れておるが、バスの表札があるじゃろう？
日に数度程じゃが、あそこにバスが止まるからの、今からなら待っておれば昼頃にはやってくるじゃろう」

(“あなた”を先導し森の中を歩いていたナコが立ち止まり、木々が途切れた先に見えてきた道路を指し示す。
その先には、僅かに錆びなどが浮いてはいるものの、人の手が入りまだかろうじて使われているのだと分かるバス停があった)

《すっ……》
(ナコが懐から包みを取り出す音)

ナコ
「ほれ、これは昨日の残りで拵えたものじゃが……握り飯じゃよ。
お主が好いておったものと合わせて幾つか握っておいたゆえ、帰りの間にでも腹が減ったら摘んで貰えると嬉しいのじゃ。
……昨日は、あの後交わりすぎてしもうたからのぅ。
ハハ、時間がのうなって豪勢という訳にはいかなくなってしまったが、勘弁しておくれなのじゃ」

(包みを手渡しながら苦笑を浮かべるナコ。
その姿は昨夜のように狐の耳や尾を晒したものではなく、人と変わらぬ姿をしている)

ナコ
「本当は……お主には、ずっとワシの家に泊まっていて欲しい気持ちもあるのじゃがな。
それは、流石にワシの我侭が過ぎるからのぅ……くふ、あの熱情の夜の甘き一時で満足したと思っておこうと思うのじゃ。
……一時(ひととき)だけでなく、ずっと今のように人の姿を取れるのであれば、もっと……違ったやり方も出来たかもしれぬが、のぅ」

ナコ
「んむっ！
あぁ、すまぬ……別れ際になって急にこんな湿っぽい事を言ってしまっての！
帰れ帰れと散々言っておったのは、ワシじゃと言うのにのぅ……くふ、ふふ……本当に情けないものじゃ」

ナコ
「さ……では、お別れじゃ、お主……ワシの、ナコの二夜(ふたや)の主様よ。

どうか、お主の住まう世界に帰っても、健やかにあっておくれよ？
帰しておいて、向こうで不幸になっていたとなっては、帰すなどせねば良かったとワシも後悔してもしたりなくなってしまうのじゃ！
ほれ、包みを持って早く行くのじゃ！　……あんまりおると、ワシの我侭がまた爆発してしまうからの？」

《ざっざ……ぴた》
（包みを受け取り数歩歩き、ぴたりと足を止める“貴方”）

ナコ
「ん、足を止めてどうかしたのかの？
何か忘れ物でもしておったのか？　……そうするとまた、ワシの家まで戻る事になってしまうが。
その場合……その、遅れてしまってバスに間に合わぬだろうし、もう一晩……ワシの家に、泊まる事になってしまうかもしれんが……」

（足を止めた“あなた”にナコが思わず嬉しげな視線を向ける。
それは共に居られる時間が1日でも長くある事を心から望んでいるのであろう事が、ありありと分かるような顔である。
ナコのその顔に胸を奥を刺激されながらも、“あなた”は忘れ物はないと、首を横に振った）

ナコ
「くやっ！？
……そ、そうか……忘れ物などはないのか。
う、む……まぁそうじゃよな、帰りの確認もしっかりしておったし……そうそうするものではないよな」

ナコ
「しかし、それなら尚の事どうかしたのかの？
ワシに、まだ何か用でも？」

（もうこれで2度と会う事はないのだろうと思っている様子のナコは不思議そうに首を傾げる。
“貴方”はそんな様子を見ながら、この2日の甲斐甲斐しくも甘く蕩けるような日々を思い返していた。
悪いものではなかった……むしろ、十分以上に喜ばしく望ましい生活だと思えたソレに思いを馳せ、2度と会う事はないと思っているナコに向かい、手を延ばしながら1つの問いをかけた）

――また来てもいいのかな？

《……ぎゅっ》
（ナコを抱きしめる音）

ナコ
「くゆ！？　お、お主どうしたのじゃ？
急に抱き寄せなどして、なんじゃお主も別れを寂しがってくれておるのならワシも嬉しいが……う、ん？
……また、来ても良いのか、とは……どういう意味じゃ？

ワシに、会いに来たいと……そう言うてくれておるのか？
……ほ、本気なのか？
知っての通り、ワシの家には何もないぞ？
お主が娯楽にしておるようなものはないし、出来る事といえば今回のようにお主の世話をしてやるか。
その、ワシが……強請(ねだ)ってしもうたような、雄と雌の交わりをするぐらいしか出来ぬのじゃが……そ、それで良いのかの！？」

《しゅり……ぎゅっ》
(再び抱きしめ、優しく背中を撫でる音)

ナコ
「く、ゅ……ぅ、ん。
お主が、それで良い……のなら、ワシは、勿論歓迎するが……本当に良いのかの？
ワシは言った通り、人の世とも妖(アヤカシ)の世とも外れてしもうたような、情けない狐じゃ……。
お主の世話をさせて貰いはしたが、その実(じつ)本当にお主の世話をしたかったというより、ワシ自身がそうして繋がりを感じたかっただけじゃし。
……そんな風に、何度も来たいと思って貰えるような価値があるとは、思え……んっ、むぅっ！
ん……ちゅぅ、ちゅっ……くちゅ、ちゅぅ……っ」

ナコ
「ちゅぅー……くちゅ、ぷはぁっ！
い、いきなり口を吸う奴があるか！　この、この……不埒者(ふらちもの)！
くゆぅ……！？　ま、また抱きしめて口を吸おうとする……えぇい、やめ……やめ、んんぅっ！？
ちゅ……んっ、ちゅぅ……ちゅぅ、くちゅ……ちゅぅぅ……ちゅぷぅっ♥」

ナコ
「んんっ……ちゅうっ、ぷ、……はぁ♥
モノを、言わせぬか……馬鹿ものぉ♥
……ぅぅ、分かった、分かったのじゃ。
こんな風に、お主から……主様から、求められては……ワシに否(いな)などと、言えるはずがないじゃろうが……酷い奴じゃ、まったく♥
少し、そのままじっとしておっておくれよ？」

《しゅる……きゅっ》
(髪の一部を解き、“貴方”の指に結ぶ音)

ナコ
「うん……これで良いのじゃ♪
今、ワシの力と匂いを篭めた髪をお主に結んだ。
これで、お主が近付いてきてくれれば……ワシには、いつでも分かるようになった。
髪はその内肌に溶けて消えるから、暫くはそのままにしておいて欲しいのじゃ。
……お主がまた近くに来てくれた時は、匂いを辿ってすぐに向かえに行くからの。
その時は、精一杯また……持て成させて貰うから、疲れを癒したいとか、我慢ならぬモノが溜まった時は、また何時でも……来て欲しいのじゃ」

ナコ
「ワシは何時でも、どんな時でも、お主が来てくれる事を楽しみに……待たせて貰うから、の♥
何時でもおいでませじゃ、ナコの……ご主人様♥
んっ……ちゅぅ、ちゅぶ……ちゅぅぅぅぅっ、ちゅぷ、ぷはぁっ♥
くふ♥　ちゅっ……くぅおおおん♥」

《さぁー……》
（風が静かに2人の間を流れていく音）